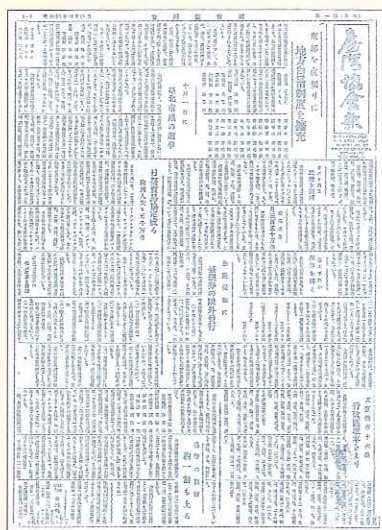


# 台湾引揚者 関係資料集

編集復刻版 全7巻・付録2

戦後六十五年以上経った現在、  
日台関係史そして  
台湾引揚者の足跡研究等に  
重要かつ貴重な資料！



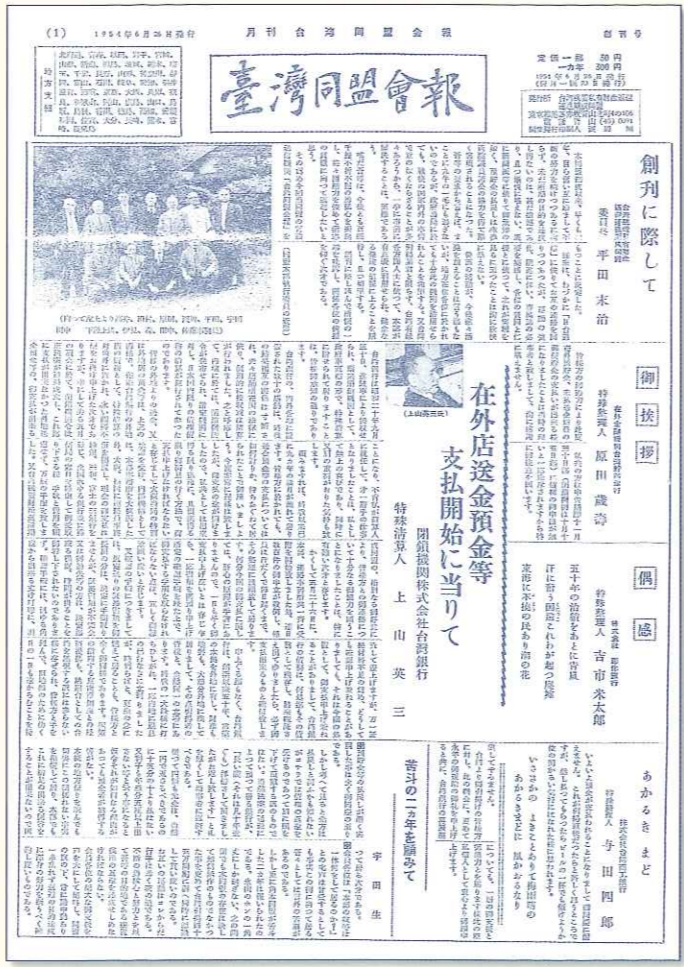
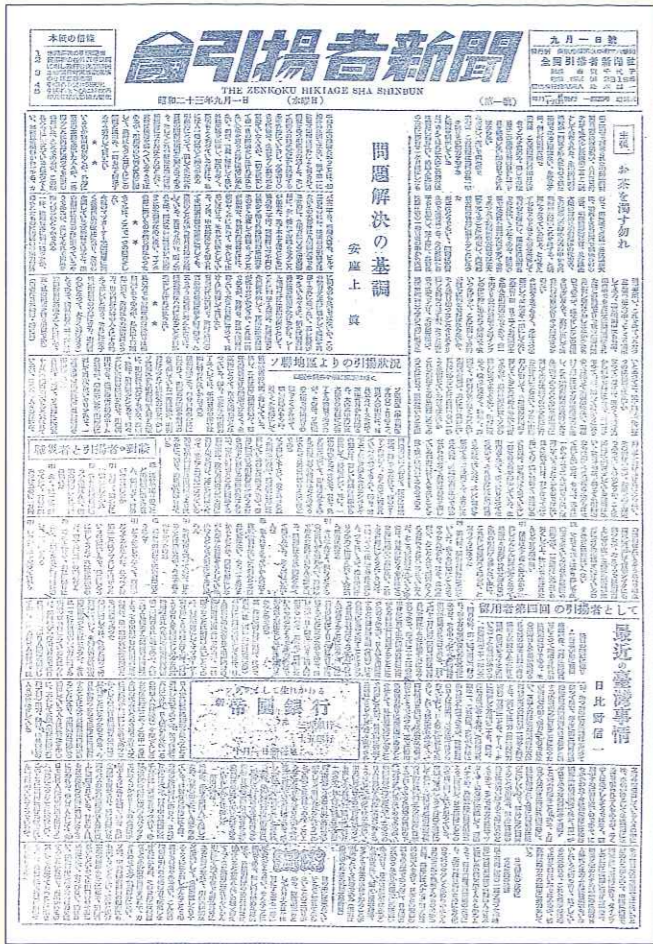
B4・A5(付録2冊)判・  
上製・総約2、500頁  
解題(第1巻巻頭) 河原功  
原本提供 財団法人台湾協会  
本体揃価格 〃

170,000円十税

・第1回配本(第1〜4巻)  
2011年11月  
本体80,000円十税

・第2回配本  
(第5〜7巻+付録2冊)  
2012年4月  
本体90,000円十税

不二出版



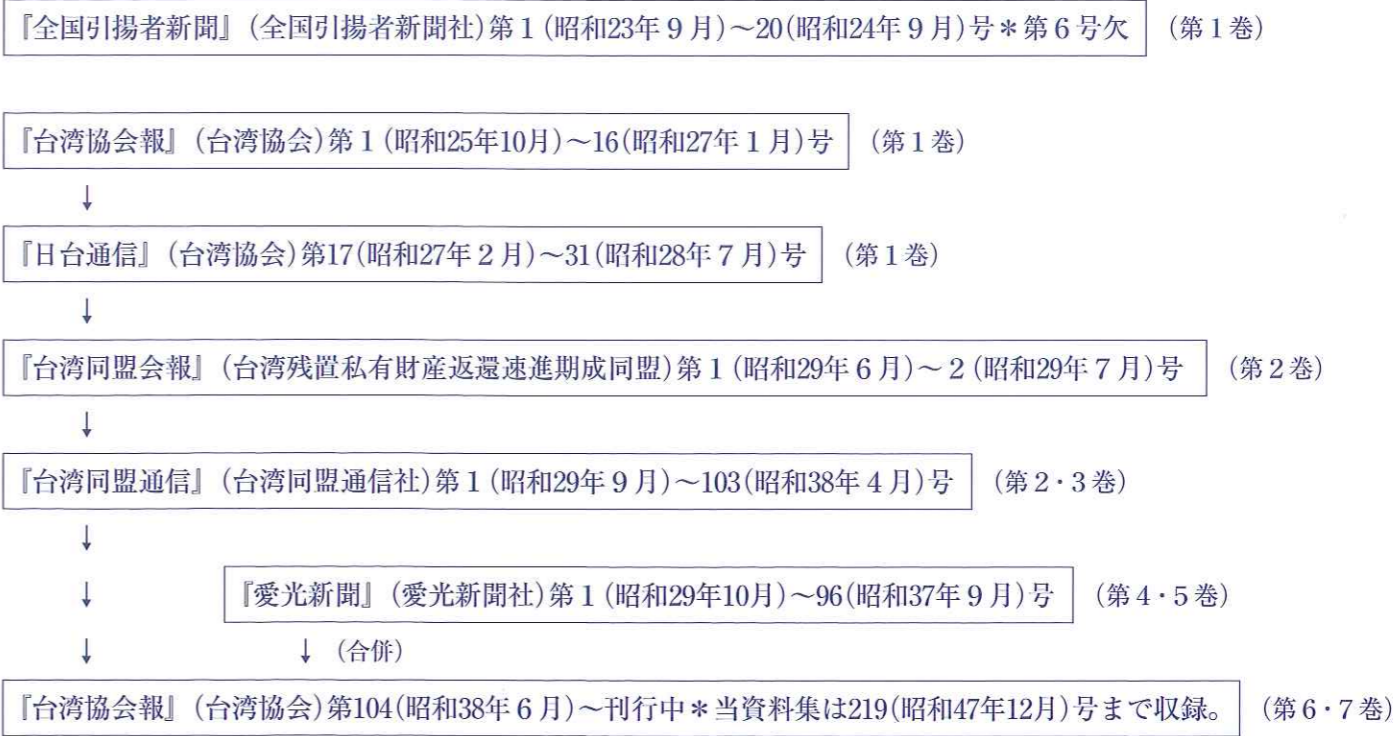
一九四五年の敗戦後、台湾からの引揚者は間もなく日本各地に引揚者の相互支援活動を開始し、他地域からの引揚者団体とともに、一九四八年八月に「引揚者団体全国連合会」を結成、翌月には『全国引揚者新聞』を創刊した。「本紙の信条」は、1. 未帰還者の引揚促進 2. 帰還者の在外資産返還に対し政府の保護確保 3. 未帰還留守家族遺族の生活援護徹底 4. 引揚者の反共民主化 5. 引揚者ならびに縁故者相互連絡親善協力更生であった。

そして一九五〇年三月に台湾協会が設立され、その後雑誌といえる『台湾協会報』（一九五〇年一〇月～五二年一月）を発行、その後『日台通信』（一九五二年二月～五三年七月）、『台湾同盟会報』（一九五四年六月～七月）、『台湾同盟通信』（一九五四年九月～六三年四月）、『台湾協会報』（一九六三年六月～）と、誌名を変えつつ台湾引揚者に関する情報を発信し続けた。

戦後六五年以上経った現在、台湾引揚当事者の追跡調査が困難になりつつあるなか、当資料集はその足跡について研究をすすめるために重要な資料といえる。

当編集復刻版は、財団法人台湾協会のご協力をいただき、また『台湾協会報』と合併した『愛光新聞』（一九五四年一〇月～六二年九月）及び『台湾引揚史』（台湾協会編、一九八二年一二月刊）、『琉球官兵顛末記』（台湾引揚記刊行期成会発行、一九八六年一二月刊）を合わせて復刻刊行するものである。——不二出版

『台湾引揚者関係資料集』収録資料（第1～7巻）刊行の流れ



## ●推薦文

### 『台湾引揚者関係資料集』を推薦します。

浅野豊美（中京大学国際教養学部教授）

台湾協会は、新宿六丁目にもビルを構え、保有資料を研究者に惜しみなく開放して下さるタイムカプセルのごとき存在である。それは戦後日本社会誕生の秘話を、台湾という南海の島の小さなレンズを通して、非常にスケール大きく、且つ、赤裸々に覗きこめる隠れた不思議空間ともいえよう。その所蔵資料群は、台湾総督府東京事務所等の活動が一気に崩れおち、大量の日本人引揚者と在日台湾人が誕生した激動の中に生み出された。私には謎に満ちていた各資料たちは、河原先生の詳細で緻密な解説によって、史料の由来と背景を付され、まことにすがすがしいかのように並んでいる。タイムカプセルのごとき不思議空間は、資料集という形で各研究者が手に取れるものとなった。

引揚げという歴史事実については、現在、ようやく各種のタブーが破られ、詳細な事実説明や記憶の聞き取りが急速になされている。しかし、その歴史的な意義を論じるには、まだまだ謎が多い。とりわけ、残された在外財産については、国民感情への行政側の配慮と、プライバシーという壁があった。私は、引揚げとは、帝国の解体にともなった公私の法的権利が人的空間的境界をまたぎ、せめぎあいながら再編される過程の中で、その最初のヒトコマとして研究されるべきと考え。七〇年の時をこえてこそ、その大変動過程の全体像は解明され、日本本土の日本人のみの「戦前」と「戦後」、いわゆる「断絶と連続」は、失われ彷徨う「地域」の中で無理なく構造的に世界史的な検証に耐えるものとして解明されよう。そんな問題意識を持ってこの資料に臨み、戦後という時代の東アジアを、台湾という強烈な光源から照らしてみるのが楽しみである。

### 『台湾引揚者関係資料集』を推す

斎藤 毅（財団法人台湾協会 理事長）

第二次大戦終結時、軍人軍属を除いても三百万人を超える日本人が海外に住んでいた。彼等は敗戦の結果、突然、慣れ親しんだ生活基盤を奪われ、戦後の混乱の中で人生の再出発を余儀なくされたのであるが、この国民的規模の体験は、今後の日本を、そしてまた、周辺地域との関係を考えていく上で無駄にはいけない大切な遺産であると思う。

このたび『台湾引揚者関係資料集』が編集復刻されることになったが、そこには、あまり知られていない過去の出来事、先人の労苦への感謝と鎮魂、逆境を生き抜いてきた逞しい体験談、甘美な懐旧談等々、様々な記事が掲載されている。

従ってその中には、歴史的事実として貴重な資料もあるし、また、当時懸命に生きていた人達の赤裸々な体験や切実な思いを綴ったものもある。人により、また書かれた時期により、表現には力点の置き方や文体の違いもあるし、また、用語も書かれた当時のそのままなので、現在では不適切とされている表現もある。しかし逆に、ある特定の歴史観、倫理観に基づいて修正整理されたものではないだけに、その個性的で不揃いなどところにかえってその時代の息吹きやその場の雰囲気を感じ興味をそえられるのである。

台湾関係者のみならず、近現代史に関心のある方々に「高覧をお勧めする。」

## ●推薦文

### 歴史の重みを背負った引揚げ

陳培豊（台湾・中央研究院 台湾史研究所副研究員）

第二次世界大戦後、海外に散在する日本邦人の引揚げが行われた。同じ敗戦による短期的な集団人口移動ではあるものの、台湾からの引揚げは特別な意味を持っていた。敗戦による軍事任務の終了ではなく、国境の変動によって余儀なく居住の権利放棄という側面を有していたのである。

半世紀にわたった日本の台湾植民地支配には複雑、かつ親密なものがあった。統治者は積極的に施政を行い、それに対して台湾人は教育、経済、文化、社会の基盤整備などの施政に伴う近代化を希求して、巧妙に対応してきた。台湾の近代史は日本の統治と台湾人の愛憎こもごもの駆け引きによって織り上げられたのである。

歴史は人間集団の相互作用によって刻まれた過去の痕跡である。歴史は政権の幕切れによって消滅するわけではない。台湾から去っても、かつて台湾に歴史を刻んだ当事者たちは、過去を反芻するだけではなく、戦後台湾のあらゆる分野にわたって直接、間接に報道したり、関与したりしてきた。台湾引揚者の各機関紙には、台湾の戦前、戦後初期の思い出、回想録、秘話、談話、随想、訪問記、近況報道、小説などが発表されている。引揚げによる立場の変更や時空の隔絶によって、これらの言説は史料として重要性、客観性、信憑性をもたらす。

台湾からの引揚げは、歴史の重みを背負ったものがあり、『台湾引揚者関係資料集』は台湾の近代史にとって、価値の高い史料が収録されている。

### 台湾引揚者の戦後史 —もうひとつの日本現代史の記録—

春山明哲（早稲田大学台湾研究所客員上級研究員、前日本台湾学会理事長）

一九四五年八月一日、日本はポツダム宣言を受入れ、連合国に対して「無条件降伏」した。陸海軍の軍人軍属約三三三万人の内地への「復員」が行われ、また、台湾・朝鮮・樺太・南洋、満州などの一般邦人三〇〇万余人は、苦難と混乱の中を内地に「引揚げ」てきた。中国・南方における戦場体験、シベリア抑留、内地における戦災・疎開は日本人の国民的体験として多く語られてきたが、「引揚者」の戦後の記録は、引揚援護局や個人の思い出を除くと比較的少なく、本書は台湾引揚者の記録として希少かつ貴重なものである。

台湾からの軍人軍属の復員は一五万余人、一般邦人の引揚者は三二万余人であった。一般邦人のうちには台湾生まれの者も多く、彼らは台湾におけるその生活と仕事の根柢を一旦に失い、着の身着のままに祖国の地を踏まざるをえなかった。「引揚者」は日本社会に適応することが難しく、また、「植民地」の経験は負の遺産とされることが難しかった。

本資料集の特色の第一は、新聞・会報・通信という資料形態の多様性と一九四八年から一九七二年という期間の継続性であり、引揚政策の展開過程をリアルタイムで把握できる。第二は情報の多様性である。紙面からは、引揚者の消息や生活再建への苦難に満ちた闘いはもとより、台湾をめぐる国際情勢、新しい日台関係の模索、植民地台湾の回想、戦後台湾の文化・経済状況までを読み取ることができる。第三として、「引揚者」という独自の歴史的背景を持つ日本人の庶民の生活と意見を知る好個の記録である。

近現代史研究はもとより、図書館の新聞コレクションや地方自治体の行政資料として、さらには、戦後庶民の生活体験を若い世代に伝えたいと願う人々にも有用な資料である。多くの人々に活用を薦めたい。

# 台湾引揚者関係資料集【編集復刻版】全7巻・付録2

第2回配本				第1回配本				配本		
付録二	付録一	第七巻	第六巻	第五巻	第四巻	第三巻	第二巻	第一巻	収録巻	
琉球官兵顛末記	台湾引揚史	台湾協会報	台湾協会報	愛光新聞	愛光新聞	台湾同盟通信	台湾同盟通信	台湾同盟通信	書名	
台湾引揚記刊行期成会	財団法人台湾協会	財団法人台湾協会	財団法人台湾協会	愛光新聞社	愛光新聞社	台湾同盟通信社	台湾同盟通信社	財団法人台湾協会	発行所	
昭和六一年一二月	昭和五七年一二月	昭和四三年一月、 昭和四七年一二月	昭和三八年六月、 昭和四二年一二月	昭和三四年一月、 昭和三七年九月	昭和二九年一〇月、 昭和三三年一二月	昭和三四年一月、 昭和三八年四月	昭和二九年九月、 昭和三三年一二月	昭和二七年二月、 昭和二八年七月、 昭和二九年六月、 昭和二九年七月	刊行年月	
		第一六〇、二一九号	第一〇四、一五九号	第五二、九六号	第一、五一号	第五二、一〇三号	第一、五一号	第一、一六号	号数	
2012年4月刊 本体90,000円+税 ISBN978-4-8350-6979-1				2011年11月刊 本体80,000円+税 ISBN978-4-8350-6974-6						

- 体裁——B4判・A5判(付録2冊)
- 上製本／総約二、五〇〇頁
- 解題——河原 功(台湾文学研究者、東京大学／日本大学非常勤講師)
- 原本提供——財団法人 台湾協会
- 定価——本体揃価格一七〇、〇〇〇円+税
- 配本及び収録内容一覧

## 関連図書(復刻版)のご案内

**旧外地「工場名簿」集成**  
全21巻

植民地支配・占領下での台湾、満洲国、関東州、華北、朝鮮、樺太における「工場名簿」44点を収録し復刻。

- 解説(堀和生)付き
- A5・A4・B5・B4判、上製本、総約6、500頁
- 本体揃価格385,000円+税
- 台湾編Ⅱ 123,000円+税
- 中国編Ⅱ 161,000円+税
- 朝鮮・樺太編Ⅱ 101,000円+税

● 推薦Ⅱ 柳沢遊・やまだあつし

**戦前期 海外商工興信録集成**  
全8巻

- 解説(高嶋雅明)付き
- A4判・上製・総3,272頁
- 本体揃価格200,000円+税
- 推薦Ⅱ 木村健二・柳沢遊

● 表示価格はすべて税別。

## 不二出版

T113・00253  
東京都文京区向丘1-2-12  
電話03・3812・4433  
ファクシムル03・3812・4464  
振替001600・294084